和歌山市モデル地区地域福祉ワークショップ支援事業報告書

「わかやま・元気ふくし」の
実 現 を め ざ し て

平成29年2月

和歌山市

目　　次

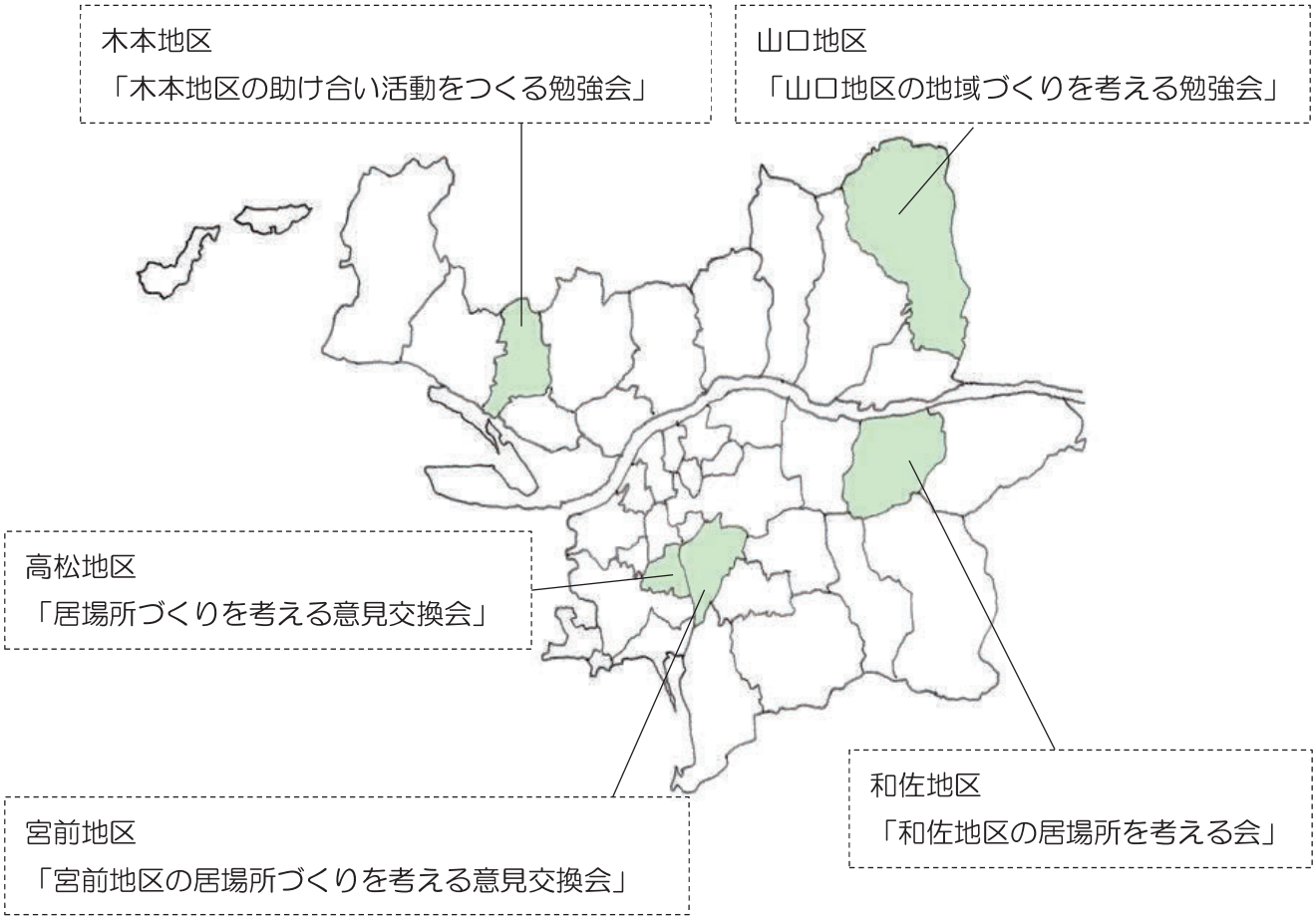
事業の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１ページ
ワークショップの日程・テーマ ・・・・・・・　２～３ページ
各地区のまとめと結果から
　高松地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４～７ページ
　和佐地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８～11ページ
　木本地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12～15ページ
　宮前地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16～19ページ
　山口地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20～23ページ
今後に向けて　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24ページ

事業の概要

本事業の概要をご紹介します

モデル地区地域福祉ワークショップ支援事業

和歌山市では平成 27 年３月に第３次和歌山市地域福祉計画「わかやま・元気ふくし計画」を策定いたしました。計画に基づく施策の展開として、平成 28 年７月から９ 月にかけて「地域福祉の担い手養成講座事業」を開催しました。「モデル地区地域福祉ワークショップ」は担い手養成講座修了生の方の中から自分の住んでいる地区で話し合いを行いたいという意欲ある方を募り、その方をキーパーソンとして地区の選定を行い、市内５地区でワークショップ形式の意見交換会・勉強会を開催いたしました。「ワークショップ」という言葉が馴染みにくいため、各地区の特性にあった個別のタイトルをつけて参加を呼びかけました。



ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟの
日程・テーマ

ワークショップの日程・テーマ等をご紹介します

高松地区　「居場所づくりを考える意見交換会」

第１回　平成 28 年 11 月 22 日（火）　13:30～15:00
「運営と担い手について」　高松地区会館

第２回　平成 29 年 1 月 26 日（木）　13:30～15:00
「居場所の名前を考えてみましょう」　高松地区会館

第３回　平成 29 年 2 月 21 日（火）　13:30～15:00
「いよいよオープン、今後の取組みは」　高松地区会館

和佐地区　「和佐地区の居場所を考える会」

第１回　平成 28 年 11 月 25 日（金）　14:00～15:30
「どんな居場所がほしいですか」　和佐地区会館

第２回　平成 28 年 12 月 8日（木）　14:00～15:30
「助け合い活動に興味をもってもらうには」　和佐地区会館

第３回　平成 28 年 12 月 16 日（金）　14:00～15:30
「これからの取組みについて　Let’s　模擬居場所！！」　和佐地区会館

木本地区　「木本地区の助け合い活動をつくる勉強会」

第１回　平成 28 年 12 月 12 日（月）　13:30～15:00
「どんな居場所にしたいですか」　和歌山市河西コミュニティセンター

第２回　平成 29 年 1 月 16 日（月）　13:30～15:00
「何からはじめますか」　木本地区会館

第３回　平成 29 年 2 月 6日（月）　13:30～15:00
「参加者交流とこれからについて」　木本地区会館

宮前地区　「宮前地区の居場所づくりを考える意見交換会」

第１回　平成 29 年１月 19 日（木）　15:30～17:00
「どんな居場所がほしいですか」　宮前地区会館

第２回　平成 29 年２月 ９日（木）　15:30～17:00
「どんな取組みからはじめていけばいいですか」　宮前地区会館

第３回　平成 29 年２月 23 日（木）　15:30～17:00
「参加者交流とこれからについて」　宮前地区会館

山口地区　「山口地区の地域づくりを考える勉強会」

第１回　平成 29 年２月 22 日（水）　19:00～20:40
「地域の現状と課題について」　山口小学校ランチルーム

ワークショップとは
　参加体験形式で、参加者のみなさんがいろいろな方向から議論し、お互いに学び、「合意形成」をはかっていく手法のひとつです。本事業では主にファシリテーター（下記参照）がグループに入った上でグループディスカッションをして、小道具などを使った手法も取り入れて話し合いを行いました。

ファシリテーターとは
　話し合いの場で発言や参加を促したり、話の流れを整理したりしながら合意形成や相互の理解を支援する人です。中立の立場で話し合いをスムーズに導く人をさします。

　ワークショップ形式の話し合いは、お菓子をつまみお茶を飲みながら和やかな雰囲気の中で行われました。本書は、参加者の話し合いの様子を取りまとめ、そこから見えてきた現状と今後にむけての課題などを整理したものです。

高松地区

老人クラブと協働での居場所づくりの取組み

（次の世代にもつなげていける魅力的な居場所の提案）

第１回　平成 28 年 11 月 22 日（火）
テーマ「運営と担い手について」

高松地区の第１回ワークショップは各地区の先頭を切って11月22日に高松地区会館で開催されました。高松では地区住民の中に居場所の拠点となる家屋の提供者があり、地元老人クラブ「高松根上り会」と協働での居場所づくりを進めていきました。第１回のワークショップでは参加者が４つのグループに分かれ、居場所でどんなことができるのか、また居場所の運営や担い手の問題についても、ざっくばらんに意見交換を行いました。居場所で始めてみたいことについては、参加者からはカラオケ、麻雀、切り絵教室、手芸教室、味噌作り、誕生日会等のさまざまな提案が出されました。各班からの提案はワークショップの最後に全体発表し、互いの考えを共有することができました。

運営について	・居場所運営は地区住民でする。 ・当番制にすると責任を感じ苦になるが月１回程度なら大丈夫。 ・当番は無償。 ・居場所の開館は午後がよい。 ・責任者をきめる。 ・曜日を決めてオープンする。 ・光熱費は居場所に来た人が利用料を支払い、その収入で運営する。
担い手について	・実行委員を４～５人決める。 ・重荷にならないようにする。 ・講座の講師は地域の方にお願いする。 ・当番は１人でなく複数でする。気兼ねなくほかの人に交替できるようにする。 ・鍵当番はある程度、少人数で。

第１回　ワークショップでの意見

第１回　意見発表の様子

第２回　平成 29 年１月 26 日（木）
テーマ「居場所の名前を考えてみましょう」

第２回のワークショップは前回のワークショップのアンケート結果の中で、実際の居場所となる場所を見学してみたいという声が多数寄せられていたため、まずは家屋の見学会から始まりました。見学会では所有者から簡単な家屋の説明と使用上の注意事項等の説明がありました。見学会後は高松地区会館に集合し、居場所を視察した感想を話し合い、具体的なイメージを描きながら、高松地区の居場所に合う名前を皆で考えていきました。愛着のある「根上り」という名称を取り入れたものや、酉年にちなんだ名前、明るく楽しい響きのある名前など多くの案が考えだされ、発表されました。考えだされた名前は、根上り会の役員会で候補をいくつかに絞り、それらの中から次回のワークショップで決定することになりました。

第２回　提案された名前の一例

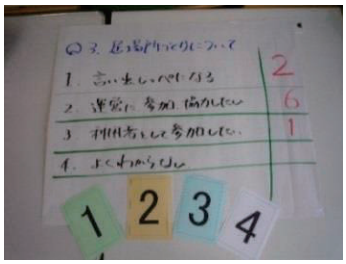
第２回ワークショップ　　名前候補を発表する様子

第３回ワークショップ　名前候補を説明する役員

第３回　平成 29 年２月 21 日（火）
テーマ「いよいよオープン、
今後の取組みは」

第２回のワークショップ後、役員会では居場所の名前候補を「高松ひよこの会」、「高松おしゃべりの会」、「高松あゆみの会」の３案に絞りこみました。第３回ワークショップでは、まず役員がこれらの名前候補が選ばれた理由について説明をしました。その後、参加者全員で旗揚げアンケート手法を用いた民主的なプロセスを重視した多数決で、「高松あゆみの会」と「高松ひよこの会」の２案で決戦投票をし、その結果「高松ひよこの会」に決定しました。この名前には参加者の「スタートはひよこから出発し、やがて時間をかけて親鳥に成長できるように」という思いや、「ひよこのように歩みを止めずどんどん前進したい」、「小さな子と母親にも利用してもらいたい」というさまざまな願いが込められています。

旗揚げアンケート手法とは、色分けした番号札を挙げて、自分の意向を示す方法で、多くの色があがった項目が多数の支持のある意見ということになり、全体像を把握するのに有効な方法です。



第３回　居場所の名前を決定する様子

また、居場所の名前が決定した後は、３班に分かれて今後の「高松ひよこの会」についての予定や、高松地区で今回の居場所につづく新たな居場所の増設についても議論が交わされました。

高松ひよこの会でやってみたいこと
・食事会の開催 ・高齢者の体験談を聴いて、記録に残し高松の遺産に ・終活の勉強会

ワークショップ終了後の動き

高松地区では、「誰とでも気軽に話せる場所」を目指して、３月から「高松ひよこの会」の居場所がスタートします。今回のワークショップの中では、これからの取組みとして、ボウリングや卓球などスポーツを楽しめる居場所や、独り暮らしの方が温かい食事をとれる居場所など、参加者の新たな居場所づくりへの意欲も感じられ、今後の広がりに期待が集まっています。

高松地区ワークショップの結果から

＜老人クラブの心意気＞

老人クラブ「高松根上り会」が中心となって、居場所づくりに動き出しました。その発端は、地区に住む一人暮らしの女性が毎日のように高松連絡所を訪れおしゃべりをして帰って行くという現実に直面したことからでした。連絡所よりも居心地の良い場所が求められていると実感した高松根上り会の役員が本腰を入れて居場所づくりに取り組みました。老人クラブが地区の助け合い活動の担い手として重要な意味をもつことが立証されました。

＜居場所提供者と老人クラブのマッチング＞

居場所づくりに動き出した老人クラブと、地区内に所有している家屋を地域の居場所として提供してもよいという方が協働して、本ワークショップで家屋の使用に関する制約条件等を含めた具体的な話し合いを進め、民主的な手法を用いて、参加者全員で居場所の名称を決定しました。その結果「高松ひよこの会」という名称で、平成 29 年３月 15 日にオープンが決まりました。

＜男女で異なる居場所への期待＞

女性は、「まずはお茶を飲んでおしゃべりする」、「楽しい趣味の活動」、「いつでも開いていて気軽に行ける場所」などの気軽に寄れる居場所を望んでいますが、男性は、次に何をするのかをアンケートで訊ねたところ、目的を明確にして集まることを基本にしていることがうかがえました。「高松地区の歴史を知る」、「先人の体験談を聞く」、「知識を吸収できる」、「健康の講座」、「高齢者の可能性の場」などの意見があり、学習的要素の含まれた機能を求めていることがわかりました。

＜見守り活動と居場所＞

老人クラブは見守り活動を行っていますが、「下校時間に子どもと会話をしながらぶらぶら歩くことが大切だ」、「下校の見守りの後に居場所に集まることができると情報交換ができて良い」という意見がありました。高齢者は子どもとの交流で、子どもの興味関心事を知ることができ、保護者と関わる中で、高齢者と若年者のつながりを作るという可能性を持っています。見守り活動後に集まれる居場所の設置には、多くの効果が期待されます。

＜個人の家屋を借りた「高松ひよこの会」がモデルケースに＞

３月 15 日オープンが決定した「高松ひよこの会」の居場所ですが、「この活動の第一歩がモデルケースになる」、「どれだけの人が集まるのかリサーチする必要がある」という意見が出ました。第一回の集まりの時に参加者の意見を聞き、「高松ひよこの会」をＰＲする、そして新たに伝えていくことから始め、今後の活動に拡がりが出来てくるの

ではないかという期待が寄せられました。

＜選択できるいくつもの居場所＞

居場所にもいろいろなスタイルのものがあり、活動の内容もさまざまです。参加したみなさんも「たくさんあると良い」、「今日はここ、明日はここ」というように多様な特徴のある居場所を選んで、関われるようになれば理想的だと考えていることがわかりました。

＜ニーズにあった場所での開設＞

女性たちから「ひとり暮らしの方に夕食を提供したい」、「月に１回でもみんなで楽しく食事できる機会があると良い」、「お弁当よりも暖かい作りたてのお料理を」という意見があり、調理のできる場所を探す必要があることがわかりました。また、「個人宅では５～６人集まるのが限度ではないか」、「地区のアパートの集会場を利用する」、「神社の社務所を利用する」などの具体的な場所候補についての意見も出ました。一方で、「倉庫やガレージが少ない」、「空き家はあるが所有者が地区在住ではないので、借りるのが大変だ」という意見もあり、場所、設備などがないということが指摘されています。

ニーズにあった場所での開設のためには、地域資源を掘り起こし、情報を発信し共有する中から活動のニーズにあった場所を探すことが課題となります。

＜運営に必要な人材＞

今後、発展的な活動をしていくためにも「リーダーになる人」が重要だという意見が多数ありました。また、担い手となる人の層を広げることも課題となります。老人クラブへの新規の入会者を募ることが大切ですが、特に「定年退職後の男性を引っ張り出す」ことが重要だという意見が多くみられました。若い会員を増やし、さらに活動を充実していくことが老人クラブの抱える大きな課題であることがわかりました。

＜今後の活動＞

まずは、おしゃべりから始めて世間話のできる場所として「行っておもしろかった」と思えるような居場所の取組みが望まれます。活動はそれぞれ持っている趣味からも広がる可能性があり、情報交換をしていく中で高松の良さを再認識し、高松への愛着を深めるような活動を推進することが求められています。

今回のワークショップから開設する居場所を第一拠点として、今後もニーズにあった居心地のよい場所を探しつつ、交流の場づくりを続けていくことが大切です。

＜情報のマッチングとしくみづくり＞

やる気のある多様な担い手が存在し、活動したい内容も決まっているのに、場所を探せないことでその活動がストップしている現状がうかがえました。顔見知りの関係の中だけで取組めることには高松根上り会をはじめ、さまざまな団体が既に取り組んできていますが、空き屋活用や運営のための資金運用など活動を展開・発展させていくには、専門的なスキルをもった支援を地域に出向いて行う体制づくりとしくみを充実することが本ワークショップで出てきた課題を解決する近道であると考えられます。

和佐地区

継続する意見交換と「地域づくりの会」発足

（メンバー各自の経験やネットワークを持ち寄る活力）

第１回　平成 28 年 11 月 25 日（金）
テーマ「どんな居場所がほしいですか」

和佐地区のワークショップは「和佐地区の居場所づくりを考える意見交換会」というタイトルで、回覧板を通して地区のみなさんに周知をしました。第１回は平成 28 年 11 月 25 日に開催しました。

まず、和佐地区ってどんなところ？

長所としては、「自然が豊かで空気がきれい」、「松下公園や和佐遊園、高積山で花見ができる」、「ひまわり畑がきれい」という意見が出ました。一方で、短所として挙げられたのは、「お店が少ない」、「交通が不便」、「若者が少ない」などの意見でした。

福祉のつながりという視点では「老人クラブの活動がない」、「地区の交流会も少ない」、「近所づきあいをしていない」、「人のつながりが薄い」、「体操自主グループができた」などの意見がありました。

どんな居場所がほしいですか？

＜機能＞

「ふらっと行ける場所」、「お茶を飲んでわいわいおしゃべりできるところ」、「話を聞いてくれる人がいる場所」「自然を活かしたカフェをつくりたい」などの意見がありました。気軽に立ち寄ることができ、いつ行っても誰かに会える、そんな常設の居場所があれば嬉しいという気持ちが伝わってきました。

＜場所＞

「歩いて行ける距離のところ、半径１㎞くらい」や「和佐地区の真ん中にあって帰りに買物ができたら理想的」という意見が多くを占めました。みなさんの理想は自然があり、買物もできる場所ということになり、妥協点がポイントとなりそうです。

＜内容＞

「囲碁などの趣味の活動」「パソコン教室」「メンズデイみたいな日があればいいな」「健康体操などもしたいな」という意見がありました。

参加するだけではストレスになる場合もあり、知らない人と話すのには勇気がいるし、声掛け要員が必要で、知らない人同士をつなげてくれるような人が居場所にいてくれるとよいということでみなさんの合意が図られました。

第１回　グループディスカッションの様子

第２回　平成 28 年 12 月８日（木）
テーマ「助け合い活動に興味をもってもらうには」

第２回は、１回目の参加者が少なかったことから、どうしたら地区のみなさんに助け合い活動に興味をもってもらえるだろうということをテーマに意見交換を行いました。

ＡＢ2 班に分かれて話し合いをしましたがＡ班は、本ワークショップの呼びかけ方、チラシの工夫、言葉の使い方などについて具体的な話し合いになりました。Ｂ班は、「人を集める方法」を掘り下げて話し合い、①自治会との協力、②個人でできることからはじめる、③地域の売りを活かした活動、④イベントなどの開催などの提案がされました。ＡＢ２班共に、まずは居場所をきっかけとして人が集い、そこで出会い、ふれあ

いの情報交換が進み、そこから担い手になってくれる人が出てくることに期待するということで合意しました。ただ、「言い出す人がいて、『この指とまれ方式』で中心になる人がいて、協力者が集まるというプロセスは理想的だが、仕事を持っている若い世代は担い手には難しいのではないか」という課題も明確になりました。

「ワークショップが終わったあとも話し合いを継続して、人のつながりも広げていけると良い」という結論でなごやかな雰囲気の中、話し合いは終了しました。

第２回　発表の様子

第３回　平成 28 年 12 月 16 日（金）
テーマ「これからの取組みについて Let’s　模擬居場所！！」

第３回は、１ 回目、２回目の話し合いを振り返り、この意見交換会で知り合いになったみなさんが今後どう助け合い活動に関わっていくかについて、話し合いました。

手法としては、今までに出た取り組みを模造紙に書いて貼り、「いいね」と思う項目に「イイネシール」を貼るという作業を行いました。そして、みなさん一人ひとり、一言メッセージを伝えました。

第３回　イイネシールを貼る参加者

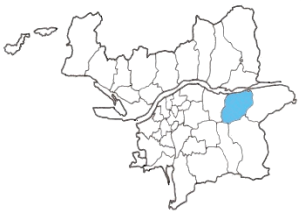
第３回　模擬居場所のおしゃべり会

最後になごやかな雰囲気の中で、居場所の模擬体験としてお茶とお菓子でおしゃべり会をしました。参加者の男性は、「こんな感じの会がずっとできたらいいな」とおっしゃっていました。

ワーショップ終了後の動き

12 月で 3 回の連続ワークショップは終了しましたが、参加者たちが「地域づくりの会」を立ち上げ、行動を起こしました。平成 29 年 1 月 13 日には 8 名が集まり、今後のことについて話し合いました。当面は西和佐にあるコミュニティスペース「みんなの家」を拠点とした活動から始め、まずは４月の茶話会を開催させることに向けて動いています。このようにして行動力のある介護事業関係者や居場所運営経験者など、メンバー各自の経験を活かした「地域づくりの会」が居場所活動の展開に向けネットワークづくりを始めており、今後の助け合い活動のひろがりに大きな期待が寄せられています。

和佐地区ワークショップの結果から



＜和佐地区にも居場所を＞

和佐地区の特徴として、「近所づきあいをしていない」や「人のつながりが薄い」など、地域での交流が少ないことが指摘されました。男性一人暮らしの参加者は、ＪＲ和歌山駅の近くにある居場所まで毎日バイクで通い、コミュニティランチのスタッフと会話を楽しみ、ボランティアで活動を手伝っているとのことで、和佐地区にも同様の居場所を望んでいました。

＜理想とする居場所像＞

「ふらっと行ける場所」、「お茶を飲んでわいわいできるところ」、「話を聞いてくれる人がいる場所」、「いつ行っても誰かに会える」などという意見がありました。目的がなくても、そこに行けば、誰かが温かく迎えてくれて、居心地が良い。そういう居場所を理想としていることがわかりました。

＜掘り起こせば担い手は存在する＞

和佐地区の担い手養成講座修了生は、福祉事業者であり、情報収集が可能でかつ非常に行動力のある人です。すでに福祉の担い手ではあるが、業務ではなく地域においての活動の担い手になる人として期待が寄せられます。ほかにも、これまで地域福祉活動と関わりが少なかった人も含めた市民、事業者などにも担い手になる人は存在することがわかりました。

＜チラシの工夫＞

参加者の募集にあたり、和佐地区では回覧板を通して、参加の呼びかけをしましたが、第２回の話し合いにも意見があったように、「回覧板は回すことが大切で、しっかりと読む人は少ない」とのことでした。第３回の手配り用のチラシは、当初の回覧板配布を行ったチラシよりも柔らかい印象になるように、イラスト等を変更して配布を行いました。

地域の人たちに興味を持ってもらうためにも、情報の発信やＰＲの方法論について、今後も考えて取り組んでいくことが大切です。

＜自治会、地域の既存団体、地域人材との協力＞
　縦割りの既存団体との横のつながりづくりが重要です。民生委員・児童委員、地区社会福祉協議会の人材などとも連携し、居場所づくりをきっかけとして、知り合い、情報交換する中で、お付き合いが深まっていくことが期待されます。また、地域包括支援センターの役割も重要で、サポートする立場として横断的なつながりづくりに期待が寄せられます。

＜イベントを通して＞
　熊野古道ウォーキングや地域発見ミニウォーキングなど、春、夏、冬休みを利用して高齢者や子どもたちと行うイベントなどが出会いのきっかけとなったり、焼き芋会やラジオ体操なども身近なきっかけとして有効であると考えられます。まずは、イベントに参加してもらうことから始まり、そこで知り合った人と交流が始まり、情報交換を通して、助け合いの必要性にも気づいてもらえることにつながることが期待されます。

＜有償ボランティアの可能性＞
　意見交換の中で、「無償のボランティアでは担い手探しは難しいと思うが有償であれば可能性が広がるのではないか」という声がありました。担い手を掘り起こしていく中で、善意の気持ちでボランティアをしたいが、全くの無償では続けられないと懸念している人に対して「有償ボランティア」は障壁を超える一つの方法ではないかと考えられます。

＜前向きな姿勢＞
　西和佐で活動している参加者は、実践に裏打ちされた問題、課題等を把握しており、話し合った内容が一つでも実現すると良いと発言し、場所、担い手、費用等について具体的な提言がありました。参加者の感想では「少しずつ前に進んでいっている気がする」や「皆が寄って話し合うことで、持ち上がった課題に対して、改善点が生まれてくるだろう」という前向きな捉え方が見られました。

＜それぞれの担い手による継続的な交流と発展＞
　和佐地区のワークショップで出会った参加者が母体となり「地域づくりの会」が発足しました。まずは月１回の会合から始めますが、参加者の顔ぶれは、介護事業関係者、居場所運営経験者、住民として居場所の必要性を強く感じている方、自宅カフェの開設を考えている担い手養成講座修了生など多様な顔ぶれです。そこに地域包括支援センターの職員もサポーターとして参画し、それぞれのキャリアを活かして支え合い協力し合うバラエティに富んだ運営が期待されています。
　支援の場、担い手人材の情報交換の場としても、今後の活動に大きな期待が寄せられます。

木本地区

柔道場から広がる地域の輪

（子どもから高齢者まで多様な世代間交流を目指して）

第１回　平成 28 年 12 月 12 日（月）
テーマ「どんな居場所にしたいですか」

木本地区での３回連続ワークショップの初回は 12 月 12 日に河西コミュニティセンターで開催しました。老人クラブの運営の勉強をしたいという方や、在宅医療と介護をつなげていくためのヒントを探しにこられた方、所有の柔道場を利用して地域の役に立ちたいと考えられている方など、それぞれがさまざまな思いを持ってワークショップに参加しました。

第１回目のワークショップでは「どんな居場所にしたいですか？」をテーマに３班に分れてグループディスカッションを行いました。参加者からは「子どもと高齢者がつながれる世代間交流ができる場にしたい」や、「気軽に雑談できる場にしたい」等の意見が出されました。話し合いを進める中では、木本地区の長所である「見守り隊」の活動が活発なことや、自治会がしっかり機能している点などが話題に上り、また課題としては独居老人の増加や、地域活動が減少傾向にあること、男性の居場所が少ないことなどを確認することができました。最後は各班でまとめた意見を全体発表し、参加者で共有しました。

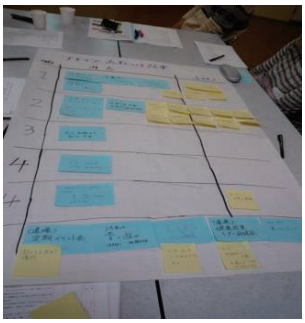
第１回　グループディスカッションの様子

第１回　意見発表の様子

第２回　平成 29 年１月 16 日（月）
テーマ「何からはじめますか」

第２回ワークショップは会場を木本地区会館に移して開催しました。この回では居場所づくりをするためにまず行わなければならないことを３班に分れて話し合いました。

最初にそれぞれが自分の意見を付箋に書きこみ、グループ内で発表し、出された意見の中から順位付けを行う手法を用いて優先順位の高いものを決定しました。各班で優先順位が最も高かったものは、「地区への広報活動と PR」、「人に集まってもらうためのイベントの開催」、「住民の意見を地域包括支援センターに届けるために、井戸端会議などで地域の声を聴く」という項目となりました。



第２回　ワークショップの様子

第３回　平成 29 年２月６日（月）
テーマ「参加者交流とこれからについて」

第３回目ワークショップは前回に引き続き、木本地区会館で開催しました。最後のワークショップではこれまで一緒に木本地区の居場所づくりについて考えてきた参加者同士の交流をメインに、マイカードを作成し連絡先の交換や、木本地区の地図の上に自分の名前を書いた付箋を貼り、誰がどこに住んでどのような活動をしているのかを確認し合いました。また旗揚げアンケートを実施し、３回のワークショップを通してよかったことや、このような地域住民の話し合いの継続についての意見を聴くことができました。

また、本ワークショップ終了後の４月に柔道場で開催する「転び方健康教室」（前後 30 分を地域の談話場所として提供する取組み）には、本ワークショップに参加したメンバーが集うこととなりました。今後、柔道場を活用しながら、まずは居場所づくりに向けて、本ワークショップの参加者同士の交流をはじめることから、繋がりを深めていく計画です。

第３回　ワークショップ　地図に付箋を貼る参加者

参加者の感想
参加してよかった。他のグループの問題点を知ることができた。

第３回　作成したマイカードを交換する参加者

第３回　旗揚げアンケートの様子

参加者の感想
住民の１人１人が何か役立ちたいと思っていることがわかった。

ワークショップ終了後の動き

今後は柔道教室の子どもたちと地域の方々が交流できるようなイベントや映画の上映会等の開催を目指しています。住民の皆さんと柔道場をつなげ、そこからまた新しい出会い、交流が生まれ、木本地区の居場所が増えていくことが望まれます。また、地域包括支援センターと連携した情報発信や情報共有など参加者ネットワークの結びつきと今後の展開にも期待が寄せられています。

木本地区ワークショップの結果から

＜木本地区の現状＞

土地が広く団地と畑が混在しています。「近所付き合いは少ないが、個人的にはそれぞれ趣味があり自分の生活のテリトリーがある」ということ、「サークル等に参加しているが、それ以外との付き合いが希薄になっている」ことが指摘されています。コンビニエンスストアが多くあり、スーパーや大型商業施設もありますが、高齢者はコンビニエンスストアをよく利用していることがわかりました。

＜求められる居場所像＞

班別の話し合い結果から、共通の事項として、雑談ができて、気楽に出かけられ、行って楽しい場所が求められていることが挙げられます。女性の居場所はあるが、男性の居場所が少ないという指摘があり、喫茶店は多いので男性はそこで時間をつぶしていることがうかがえました。話し合いの中で出た意見には「ここに行ったら誰かに会える」「お茶を持って集まる場所」といったおしゃべり機能を求めるものと、「認知症予防」にみなさん興味があるので、医師による認知症の講演会を開いたり、高齢者を対象とした詐欺への注意喚起など、生活の注意事項を知ることのできる学習機能を求めるものがありました。

＜求められているサロン活動と助け合い＞

コミュニケーションをとる場所として「集まって話をする」、「趣味などを教えてもらえる場がほしい」、「体操教室や輪投げなどの活動がもっと活発になればいい」、「手芸やカラオケを楽しめる場所」、「介護経験者の話を聞く機会」等のサロン活動ができる場があればよいという意見が多くありました。また、「家事などの助け合い」、「介護のことなど困りごとの相談、お話を聞ける場所」など人とのつながりから助け合いに発展していくことへの可能性があることもわかりました。

＜地区社会福祉協議会との連携と既存の活動＞

話し合いの中で「地区社会福祉協議会や自治会、民生委員等の組織の活動が活発」、「防災訓練が盛んだ」という意見がでました。また、「社会福祉協議会が小学校と協力して昔遊びを体験したり、子どもたちの見守り隊の活動などが活発だ」という意見がありました。さまざまな助け合い活動の中で、地区社会福祉協議会の活動と既存の活動をネットワーク化し、情報交換をしていくことが望まれます。

＜理想的な交流の場＞

老人クラブの会員が中心となって「子どもの見守り活動」を行っていますが、「見守り隊」の高齢化と老人クラブへの入会者が少なく、人数減少が課題となっています。現時点では、若い人と老人クラブの接点はありませんが、子どもとおばあちゃん、おじいちゃんが繋がれて、若い人、保護者も世代間交流に価値を見出すことができるような交

流が望まれています。今後、老人クラブと若い人との接点をつくることができたなら、夏祭り等のコミュニティ主体のイベントが復活できる可能性があることも期待されるところです。

＜近隣地区との交流連携＞

ワークショップに松江地区の方の参加がありました。木本地区と松江地区は自治会同士の交流があります。ウォーキング大会を開催したり、何地区か合同で植樹祭を開催し、交流をはかっています。植樹祭は子どもが植樹し、世代間、地区間交流が可能になっています。地元企業の協力もあり、木本と松江は深い交流があることがわかりました。

＜イベントの開催をきっかけに＞

居場所を立ち上げた時の広報手段についてイベントが効果的ではないかという意見がありました。例えば、夏祭りや健康講座、介護保険説明会など楽しそうなイベントや生活の役に立つイベントなどがあげられます。また、バレンタイン、ひなまつり、折り紙、絵本の読み聞かせなど、定期的な催しをすると人が集まりやすいという意見が多数ありました。まず、知ってもらう初めの第一歩として、イベント開催の有効性が考えられます。

＜情報発信の必要性＞

皆に知ってもらうために「地区への広報活動とＰＲが必要」という意見が多く出ました。さらに「どこにどんな人がいるかわからない」ということから、「情報を集め、共有し、連携の仕組みをつくること、地域の情報を発信する手書きのポスターをつくることから始めよう」という意見が出ました。活用すれば、交流も深まり、地域のこともわかり、ニーズに対してマッチングできます。点と点を線でつなげるためにも有効な手段として発展することが期待されます。

＜柔道場を集いの場と考える可能性＞

木本地区の担い手養成講座修了生は、柔道場を運営している方です。高齢者の「転び方教室」を開催するにあたり、担い手養成講座で「地域の居場所の効果」を学んだことを活かして、柔道場の中に喫茶スペースをつくり、地域の交流を図りたいとアクションを起こしました。定期的に子どもと地域の人が一緒に過ごす世代間交流の場、また若い親と高齢者の方との出会いの場となることも期待されます。

＜さまざまな立場の方との出会い＞

地域包括支援センターの職員や老人クラブの役員、医療機関で地域連携に携わる人、何か自分にできることがあればという地区住民など、さまざまな立場の方々が本事業を通して知り合いになることができました。「この場で話し合いをして終わりではなく、現実に形にしていけるようにしなければならないと改めて思った」「住民の方々の意見がきけるこのような貴重な場をつくっていけるようにさまざまな機関と連携して取り組みたい」といった感想もありました。本ワークショップが、地域活動をしているさまざまな方々の出会いの場として、また、仲間づくりのきっかけとして有効な時間であったことがわかりました。

宮前地区

新たな出会いで新チーム誕生の可能性

（単位自治会、寺社、病院の連携で地域に新しいムーブメントを）

第１回　平成 29 年１月 19（木）
テーマ「どんな居場所がほしいですか」

宮前地区のワークショップは年明けから開催されました。自治会関係者や民生委員、防火委員、女性議員に加え、ケアマネージャーや地域包括支援センター職員等、福祉専門職の方々が会場の宮前地区会館に集いました。ワークショップでは３つのグループに分かれ、参加者の自己紹介の後、各自が現在地域を活性化させるために活動をしている中で抱えている問題や、宮前地区で理想とする居場所について意見交換をしました。それぞれの視点から、さまざまな課題や特色のある居場所づくりへの意見が提案されました。

第１回　ワークショップの様子

地域の人の顔と活動がみえない

集会所が自治会以外の人は使用できない

参加者が活動の中で感じている問題

第１回　　全体発表の様子

第２回　平成 29 年２月９日（木）
テーマ　「どんな取組みから
はじめていけばいいですか」

第２回の宮前地区ワークショップでは、参加者の方々が個々の活動を通して、居場所づくりに発展できる可能性はないかを掘り下げて考えました。今回も３班に分かれ意見交換をし、最後に全体発表をしました。話し合いの中では、カラオケや食事会、ビデオ鑑賞会などの既存の活動や、宮前地区で活発に開催されている健康体操の延長に居場所機能を構築できるのではないかという意見が多く出されました。また仲間を増やすために必要なことや、「地域で人の役に立ちたい」、「地域とつながりたい」と考えている人たちが多くいるにも関わらず、その人たちの思いが地域とうまく連動していないことが大きな課題として浮かび上がりました。またこれからの宮前地区の居場所づくりを担っていく社会資源についても整理してみました。

（宮前地区の社会資源の例）
老人クラブ・婦人会・日赤奉仕団・防火委員
自治会・民生委員・友人・近所
地域包括支援センター・薬剤師
生活支援コーディネーター・ケアマネジャー

第２回　ワークショップの様子

第３回　平成 29 年２月 23 日（木）
テーマ　「参加者交流と これからについて」

第３回は、前回参加者から誘いを受け、初めてワークショップに参加された方もありました。

最初に、第１回、第２回の話し合いの結果の振り返りをしました。ホワイトボードにその要点項目が貼り出され、その項目の中で参加者が良いアイデアだと賛同できるものに「イイネシール」を貼り、順番に自己紹介をしていきました。「地域の困り事、洗い出しが大切」「世話焼きさんの存在」「体操教室＋おしゃべり系居場所」が多数の支持を得ました。

第３回　イイネシールを貼る様子

次に、一言メッセージを一人ずつ順番に話しました。今回初めて参加されたお寺の住職の方は「寺は元々人の集まる場所、寺を活用してもっと地域を活性化したい。場所がなかったらうちを使ってください」と力強いメッセージを発してくれました。また、３回連続出席された担い手養成講座修了生は「地域の現状を考えた時に、福祉の事業者の情報を知ることは大切。事業所見学に行ったり、事業者の方からも PR してもらうような機会が必要ではないですか」と発言。単位自治会長のお一人が「４自治会の会長が揃っているから、まずは合同でカラオケ大会をやってみましょう」とお声かけを行うなど参加者からは一言では収まらない心からのメッセージが続きました。

その後、旗揚げアンケートを行いました。本事業の評価についての質問では、全員が「事業をやって良かった」という番号札を挙げました。

第３回　旗揚げアンケートの様子

最後は、お茶とお菓子で歓談する時間を設けました。一言メッセージを受けて、カラオケ大会の日程調整をする方々、「このまま終わったらもったいないんじゃないの」と次に向けての提案をされる方。みなさん、前向きにとてもパワフルな考えをお持ちで、楽しそうなその笑顔に心温まる空気が優しく漂っていました。

５月 20 日には南出島集会所で、４自治会合同のカラオケ大会を開催し、その時に意見交換会も行うことに決まりました。本ワークショップの場で初めて出会った人たちが地域福祉を合い言葉に新しい取組みを始めるきっかけができました。「まず、やれることからやらないと始まらない！」という出会い、ふれあい、助け合いのステップが期待される最終回となりました。

宮前地区ワークショップの結果から

＜地域の特性＞

ワークショップでは、宮前地区は、さまざまな活動が活発に行われているところで、自治会館を持っているところもありますが、場所がなくて困っているという感想や、単位自治会など個々はしっかりしていますが、縦割りの印象が強く、横のつながりが少ないという意見が出ました。

また、「結びつきが多い」、「仲間意識が強い」、「団結力がある」という意見の一方で、「よそから来た人はつながりにくい」という指摘もありました。

＜居場所に求める機能＞

「会話」というキーワードでは、「皆で会話するのが第一目的」、「楽しく会話できる場所」、「悩み事を聞いてほしい」という意見がありました。

「気軽さ」というキーワードでは、「きっかけがあったら行ける」、「いつでも行ける」、「人との出会いができる」という意見がありました。

「孤立予防・見守り」というキーワードでは、「いつも来るのに来ない人を気にかけて声かけする」「ひきこもりの予防になる」「ひとり暮らしの人を孤立させない」という意見がありました。

＜求められているコンテンツ＞

居場所における具体的なメニューとしては、「体操」「健康の話」「料理教室」「俳句」「手話」「カラオケ」「ビデオ鑑賞」「囲碁・将棋」「趣味の会の作品展」など、さまざまな案が出され、健康で文化的で楽しいコンテンツが求められていることがわかりました。また、「買い物代行をしてくれるボランティア」や「待機児童を見守ってくれるところ」、「困り事を相談できるところ」、「子どもに勉強を教えてくれるところ」など、高齢者から子どもまで交流ができ、細やかな福祉サービスも提供できるような居場所が必要とされていることがわかりました。

＜体操教室＋おしゃべり系居場所の提案＞

「WAKAYAMAつれもて健康体操」に関わっている方、その普及の活動を続けている方がワークショップに参加していました。体操の前後に、お茶を飲んだり楽しいことができるような体操教室と、おしゃべりできる時間を加えた機能を持つ居場所が望まれていることがわかりました。

また、すでに体操教室とおしゃべり会が一体となった活動をされている方も参加しており、体操ができない（足が痛いなど）方もおしゃべりが楽しみでその場に参加しているという報告もありました。その集まりに顔を出さないと周囲が心配になり、誰かが声をかけるという環境も出来上がっており、体操教室をベースとしてさらに付加価値を持つ居場所の形態の一つではないかと考えられます。

介護予防の取組みでも、「体操」はひとつのキーワードになっていることから、「体操教室」に集うことと、みんなが望む快適な居場所の機能を合体させた「体操＋おしゃべり系居場所」のニーズが今後高くなることがうかがえました。

＜花いっぱい運動の付加価値＞

いくつかの単位自治会で取り組んでいる地域活動として、道路沿いに花を植える活動があります。「通りがかった人に宮前はきれいな地区だと思われたい」という気持ちが連帯感を生み、活動を定着させていることがうかがえました。花植え活動に集まった人たちが地域に誇りを持ち、楽しくおしゃべりし、交友を深めることで情報交換の場として、外の居場所となる可能性を持っていると考えられます。

＜活動に興味を持ってもらうために＞

すぐに出来ることとして「すでに活動している場所へ見学に来てもらうことから始めてはどうか」という意見があり、呼びかけから着手することの必要性が見えました。

話し合いの中で「自分に関心のあることなら人は集まるので、ニーズを把握するためにアンケートをとってはどうか」という提案があり、「今後も本事業のようなワークショップを開催したり、地区にあるコンビニエンスストアの経営者や薬局、地域の住民などに呼びかけて、集う機会を作ることが大切だ」という意見もありました。これらのアイディアを、出来ることから、出来る人が着手して、興味関心を持ってもらう努力を続けていくことが大切だと考えられます。

＜担い手はいるが発起人がいない＞

「役に立つことがしたいと言っている人はいるし、出来ることがあれば手伝いたいという人の声は聞こえてくる。また、時間のある人はいるし、手を揚げる人がいればすぐに集まれる環境にはあるのではないか」という意見がありました。「発起人になる人が不在で、誰かが手をあげれば、『この指止まれ方式』できっと協力者はいるはずだ」という意見も出ました。課題としては、地域と関わりを持ちたい人は多いが、そのような人たちと地域をうまくマッチングできる人がいないということだと考えられます。実際、人に活動してもらうためには、具体的に時間や場所等を提示できなければ「また今度お願いします」で終わってしまうので、発起人となる人の掘り起こしが急がれます。

＜今後の取組み＞

横のつながりが薄いという意見からワークショップ参加の自治会関係者の属する4つの自治会が、横のつながりを目指してカラオケ大会を開催することになりました。第１回、第2回の班別の話し合いでも「カラオケ」は共通の項目だったので、これをきっかけに行動を起こすことになりました。最初は4自治会から始まり、それが横へ横へと広がっていくことが期待されます。それと同時に楽しいカラオケの活動を通して、助け合い活動への興味関心にも拡がり、福祉の地域資源と人的ネットワークがつながれば、課題の解決に向けても一歩ずつ前進していくのではないでしょうか。担い手は数多いということを考えれば、カラオケ大会からの「助け合い活動の発起人」の掘り起こしに期待が寄せられるところです。

山口地区

地域に根付いた助け合い活動にむけて

（自治会のメリットは「祭」と「防災」！地域のことは地域で）

第１回　平成 29 年２月 22（水）
テーマ「地域の現状と課題について」

山口地区では、山口まちづくり協議会メンバーを中心に地域包括支援センター等の協力のもと「山口地区の地域づくりを考える勉強会」を開催し、30 人近くの地域の方々が集まりました。

まず、開会にあたり山口まちづくり協議会会長より挨拶がありました。

その後、さわやか福祉財団のさわやかインストラクター高林氏から「我が事・丸ごと地域共生社会の実現に向けて」というテーマで、国の事業説明と地域に何が求められているかについて説明していただきました。

我が事＝地域の中でみんなで解決する
丸ごと＝高齢者、障がい者、子どもなど

さわやかインストラクターの高林氏

次に、ＡからＥまでの５班に分かれてグループディスカッションを行いました。

３年前に行われた「地域づくり座談会」（平成 26 年２月 15 日　於：北コミュニティセンター）の結果をもとに、「時代の流れ・地域の変化を考えてみましょう」と意見交換が始まりました。

変わったこと・改善されたことはありますか？

班ごとにさまざまな意見が出ましたが、社会の変化に伴い「困りごと」は増えたが、山口地区は福祉の面でも取組みを進めてきたので、自治会の役員や民生委員の尽力を始め、地区社会福祉協議会、まちづくり協議会、老人クラブ等の連携に加え、地域包括支援センターのサービスなども利用しながら、個々に課題解決をしているということでした。

関係者を含めると 40 人を超える人が一堂に会して、個々のグループで活発に熱く意見交換がなされました。

グループディスカッションの様子

＜グループ発表＞

Ａ班では、取り組むべき内容を書面で持参し「①自活できる高齢者の教育講座」や「②生きがいのある高齢者生活に必要な施設、交通手段の整備」、「③空き家、放置農地への対策」を提案した方がいらっしゃいました。また、高齢者の見守りに人が不足していることや、女性の独居高齢者のところに自治会の役員（男性）が一人で行けないという状況もあり、民生委員を増やすべきだという提案もありました。一方、「４月から始まる生活支援体制整備事業についてわかりやすい説明がほしい」等の要望もありました。

Ａ班　発表の様子

Ｂ班では、３年前より困り事は増えているという認識のもと、新興住宅地居住者が自治会に入会しないことを問題点に挙げた意見交換が行われました。「学校と協力してＰＴＡ活動から自治会活動へ」や「平日協力できなくても、土、日の当日スタッフとして協力してもらって親交を深めていく」などの意見がありました。自治会のメリットは「祭」と「防災」ということを第一に、若い世代との交流が大切だということで合意しました。

Ｂ班　発表の様子

Ｃ班では、地域での生活の中で感じているさまざまな困り事について話し合い、その内容を解決するための優先順位をつけて整理をしました。

「外出のための移動手段がない」、「市役所等から送付されてきた書類に記入したり送付したりが不安で大変になる」、「地域の単位が山口全体では大きい」、「子供が遊べる公園が近くにない」という意見が上位になりました。

Ｃ班　発表の様子

Ｄ班では、「出てきていない人が心配だ」という声が多く、「引きこもっている人、孤立している人」に対して何かをきっかけに参加してもらおうという話になり、ました。出てきたアイディアとしては、「老人クラブに参加してもらう」「花見」「年に１回の文化祭」など行事を楽しむ気持ちが大切だという話になりました。また、産廃関連の運動で地域が団結したという意見もありました。

Ｄ班　発表の様子

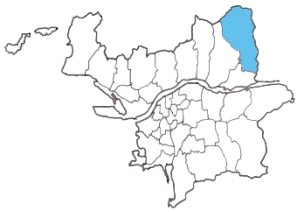
Ｅ班では、自慢できることとして①地区の行事（旅行、地区文化祭、敬老会等）が多いこと、②近所づきあい（40 年来のお付き合い、ちらし寿司のお裾分け、一人暮らしの高齢者への声かけなど）がありました。困っていることとして、自動車がないと不便なことや避難訓練の参加者が減少傾向にあることが指摘されました。「こうなったら山口地区がもっと良くなる」という意見として「お年寄りのニーズを把握する」「跡取りの会の復活」「声かけして顔見知りになる」などがありました。

Ｅ班　発表の様子

最後に、生活支援コーディネーターの門脇氏が「今日の話し合いで出てきた課題を一つずつ、少しずつ解決していくために、地区のみなさんと協力していろいろな情報共有をしながら取り組んでいきたい」という気持ちを伝え、拍手の中で幕を閉じました。

生活支援コーディネーター　挨拶

山口地区ワークショップの結果から



＜はじめの一歩は「声かけ」から＞

「道で出会ったら気軽にあいさつし、ご近所で困ったことがあれば、助け合えるようになったらいいと思う」、「この地区では人との距離感がとても近いと思う」「参加していくこと、声をかけていくことがまずは第一歩だと思う」という意見が多数あり、すでに実践している人も多いですが、このような取組みを広げていくことが大切です。

＜高齢者が抱える交通手段の問題＞

班別の話し合いで、共通の課題にあがったのが、交通手段の問題です。「自動車がないと不便だ」、「車の運転ができなくなったら困る」、「原付に乗らなくなったら買物難民だ」等の意見がありました。自動車に乗らない人は不便な思いをしているという共通認識が見られます。地域包括支援センターの送迎サービスを利用している参加者もあり、とてもありがたいと発言されていました。地域包括支援センターのサービスに加えて、近隣の助け合い活動の中で、買物代行、あるいは買物に一緒にいってくれるサービスなどが生まれてくれば、この問題の解決策の一つになると考えられます。

＜PTA活動から地域活動へ＞

新興住宅地に居住している人や若い人たちが自治会に入会しないという問題が発生しています。自治会に入らないとコミュニケーションもとりにくく、情報交換も難しくなります。「若い入居者は、まちなかのマンションを選ばずに自然豊かな山口を選んで家を建てているのだから地域性も理解してくれるはずだ」という意見も出て、若い世代の方との交流が課題となっていることがうかがえます。

まずは、子育て世代の方はPTA活動には参加されるので、学校行事を通して、保護者層と地域の人が交流する機会が生まれます。また、地域と学校との連携により餅つきやお祭など同じ行事に参加することで、さまざまな世代の住民が交流するきっかけとなり、お互いの文化や価値観を共有できる場ともなり得ます。PTA活動を通して、地域に馴染んだ人たちが、自治会のメリットにも気付き、共に地域を支える人材となっていくことへの期待が寄せられます。

＜助け合い活動や地域活動の参加率の高さ＞

ふりかえりアンケートで助け合いの地域づくりに興味があるかと訊ねたところ、「すでに助けあい活動や地域づくり活動をしている」という人が 6 割を超えていました。「機会があれば参加したい」という人と合わせると 9 割以上の人が助け合いに関わる気持ちが強いことがわかりました。アンケートには、「地域の清掃活動等を自治会のみんなで話し合い、できない人についてはみんなで認め合っている」、「ゴミ収集場所等についても、場所を提供していただいたり、地区自治会で解決し合っていることが多いと思う」という記述もあり、地区としての取組みが進んでいることがうかがえます。

＜我が事・丸ごと地域共生社会のイメージについて＞

アンケートでお訊ねした我が事・丸ごと地域共生社会のイメージについては、以下のような記述がありました。代表的なものを紹介します。

○この地域に生まれてよかったと心から思える。この地域で生活できて心から良かったと言える。それぞれが感謝できる生活ができるような社会が実現できている地域だと思う。
○「やってあげること」を行動に移していくことが良い循環のきっかけになるのではないか。そういう気持ちをみんなが持っている地域が「共生社会」。
○買い物難民と呼ばれる方々をシェアして店や病院へ送り迎えがスムーズになされている。若い人の縁談をすすめ、カップル誕生、子どもが増えていく地域社会。耕作放棄地に対して、みんなで協力して水田づくりをすすめて、収穫の喜びを味わい合う。ゴミをみんなでなくす。そのために協力しあう。

地域コミュニティが構築され、「お互いさま」の文化があり、さまざまな課題が解決され、世代間交流もある住み心地の良い地域社会をイメージされていることが見てとれます。

＜我が事・丸ごと地域共生社会を実現するために＞

アンケートでは、我が事・丸ごと地域共生社会を実現するためにどんなことに協力できるかを訊ねました。代表的な意見は「国に頼りきらず、地域の中で自分たちができること、しなくてはいけないことなど、自分たちから発信していかなくてはいけないと感じた」や「地域自治会でできることとできないことがあると思うが、単位自治会でできないことは何かを出し合って、山口地区全体で考えていく必要があると思う」、「自分自身が寝たきりにならないで、いきいきとした老人生活ができるように努力しており、皆がそうなると地域が活性化すると思う」というもので、それぞれの意見には当事者性が見られ、自分たちで我が事・丸ごと地域共生社会を作っていく意気込みのようなものを感じることができました。

＜ワークショップの感想＞

日頃から、さまざまな活動をされている方の参加が多いワークショップでしたが、「これからの高齢者社会について、自分が思っていた以上に、たくさんの問題があった事に気付かされた」、「今また再度地域のことについて考えられたことは良かったと思う」、「とてもよかったので、続けることが大切」という好意的意見がありました。同時に「いろいろな制度をもっとわかりやすく、みんなに行き届くようにしてほしい」や「現在のしくみでは何が足りないのかいまだにわからない」といった制度の説明についての要望もありました。

＜地域づくりと関連する分野の事業などとの効果的な連携＞

国が推進する「我が事・丸ごと地域共生社会」の動きについて、現時点では地区においての理解が浸透していないことがうかがわれます。市が推進する公民協働の取り組みや多様な分野で市民と市などの協働がすすんでいることをふまえ、市民との意見交換を密にしながら制度や分野の縦割りを超えて取り組んでいくことが大切です。

地域と協働する体制づくりに取り組むとともに、地域のさまざまな主体をネットワーク化し、それぞれの長所を活かした協働を推進することが求められています。

今後に向けて

「わかやま・元気ふくし」の実現を目指して

地域福祉への理解を広げるために

- 自治会や関係団体・事業者等とも連携し、地域に根ざした実践的な福祉学習や、それぞれの地域の福祉課題の解決に向けた話し合いを重ねることが重要です。

- 効果的な学習や話し合いをすすめるため、参加や発言を促したり整理したりしながら理解をすすめるファシリテーターの役割を、地域福祉推進に関わる市職員や関係者等が担えるよう、ファシリテーションのスキル（技能）を高めていくことが求められます。

- 地域福祉の啓発や学習を参加型ですすめていく手法として、ワークショップは有効だと考えられますが、ワークショップという言葉に抵抗感がある人もいるので、名称や雰囲気づくり、すすめ方は参加者の状況に応じて柔軟に工夫することが大切です。

多様な担い手のコーディネート機能を高めるために

- 地域に根ざした活動を行う団体（自治会など）と特定のテーマに焦点をあてて専門的な活動を行う団体（ボランティアグループやNPOなど）が共に理解し合い、協力し合いながら効果的に協働できるように、つないでいくことが重要です。

- 先進的な取組みの経験を（トラブルなども含めて）蓄積していくことで、そこから見えてくる課題を解決しながら、地域の状況に応じた取組みを柔軟に、より効果的に市全体に広げていくことが大切です。

立ち上げや継続への支援をすすめるために

- 地域の多様な資源を有効に活用して、活動の拠点を確保できるように、さまざまな活動を支援することが大切です。

- 活動に必要な財源が確保できるよう、公的な支援のあり方や、既存の補助金等を有効に活用するなどの検討をすすめる必要があります。

- 活動の情報を発信するためのスキル（技能）を高める支援や、情報を伝える手段の充実、個人情報などをめぐるトラブルを防ぐためのルールづくりなどをすすめる必要があります。

支援を必要とする人の発見と福祉活動などへのつなぎをすすめるために

- 地域での見守り活動や、生活困窮者自立支援の取組みなどとも連動させながら、社会的に孤立し潜在化しがちなニーズをきめ細かく把握し、地域での福祉活動や適切なサービスなどの支援につないでいくよう、市民や関係者とも連携して積極的に取組むことが大切です。

地域福祉活動支援のしくみづくりのために

- 地域福祉の推進機関である市社会福祉協議会とも連携して、コミュニティワーク（地域活動支援）機能をさらに充実するとともに、地域包括支援センターをはじめとする地域の福祉専門機関・事業所、専門的な活動を行うNPOなどが地域の活動をあらゆる角度から支援できるよう、取組みを推進することが重要です。

和歌山市モデル地区地域福祉ワークショップ支援事業
報　　告　　書

発　　行　和歌山市福祉局社会福祉部　高齢者・地域福祉課
〒640-8511　和歌山市七番丁２３番地
電　話　073-435-1063
メール　koureisha@city.wakayama.lg.jp

運営・編集　アクト研究室　プロジェクトチーム